

砂漠の泉  
DESERT SPRING

ウェン・イン・ツァイ

Wen-Ying Tsai

1990-91 ● cybernetic sculpture  
USA



illustration: Margot Campos, photo: John Woodford

This cybernetic sculpture system that focuses on the aspect of homeostatic relation of art to its environment is a new generation of environmental sculptures based on the concept of stability and disturbance.

It is a sculptural environment that is endowed with virtual intelligence, which enables it to maintain its internal stability by coordinated real-time spontaneous and interactive responses that automatically compensate for changes in the environment.

When a visitor enters the threshold of this darkened space, his presence is sensed by the sculpture's infrared and audio antenna; thus by his movement and sound, he stimulates and destabilizes the sculpture from normal relaxed undulation to excited rapid palpitation. It is only when the visitor leaves that the sculpture returns to its usual tranquil undulating state, as if awaiting the next round of confrontation.

In these times of extraordinarily rapid change, We are all witnesses to the destabilization taking place in our world. Thus it is a relief and reassurance to discover in Tsai's Work that each disturbance and resulting chaos is followed by order in the absence of human interference.

—Wen-Ying Tsai

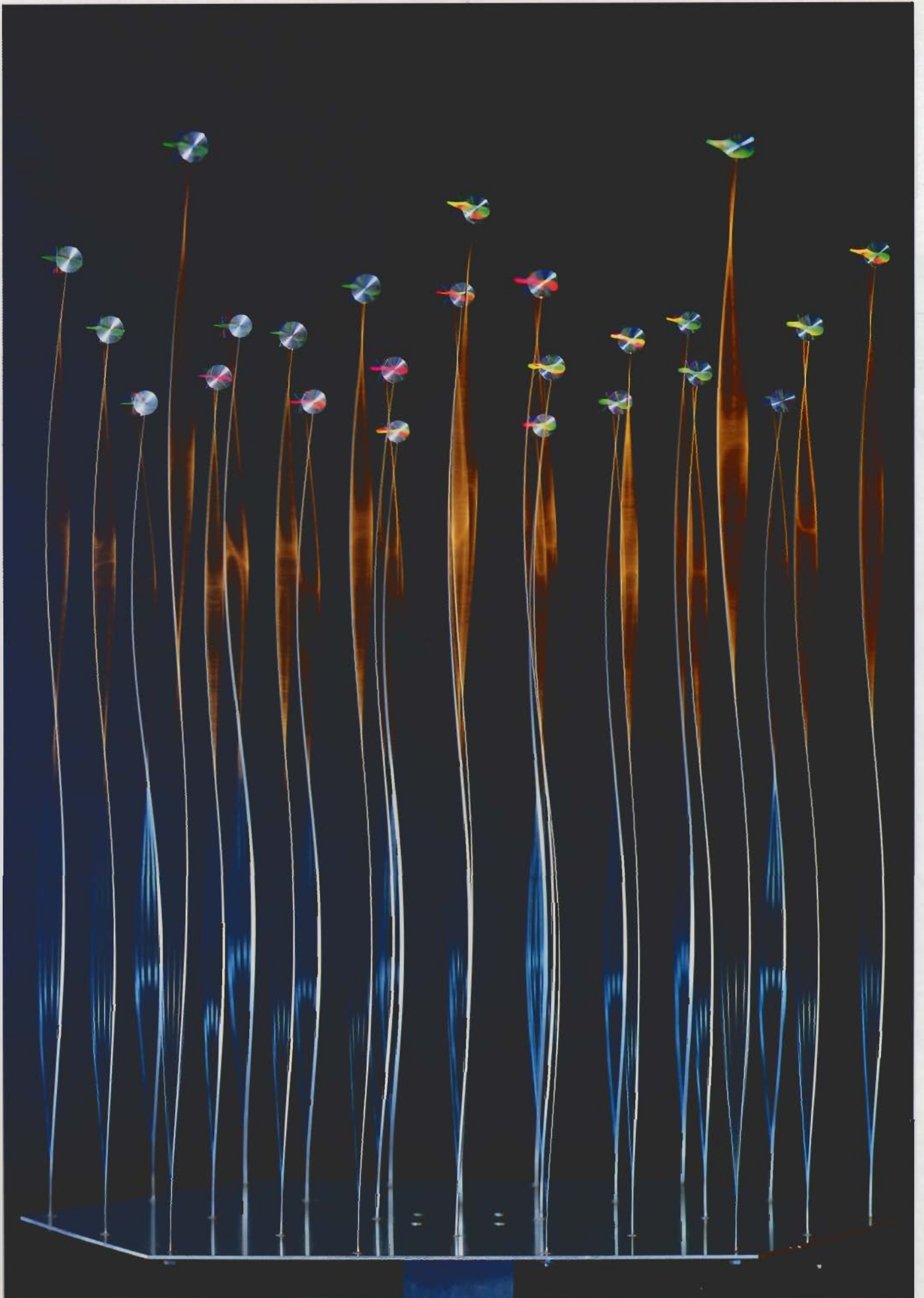
アートが、それをとりまく環境と恒常的な関係を持っている点に注目した、このサイバネティック・スカルプチャー・システムは、安定と動揺という概念に基づいているという点で環境彫刻の新世代ともいべき作品である。

この作品環境にはもともとある程度の知性が備わっており、内的安定性を持続できる。それは瞬時にかつ自発的にわき起こり、環境の変化を自動的に捕捉するインタラクティブな反応をする。観客がこの暗黒の空間の入口に立つ。彼の存在は、そのスカルプチャーの赤外線オーディオ・アンテナに察知される。通常は緩やかにゆらめいているそのスカルプチャーは、人の動作や物音によって刺激され、動揺し、激しく振動する。それが平静な状態に戻るのは唯一、その来訪者がその場を離れる時で、それはまるで次の遭遇を待っているかのようでもある。

現代の異常に急激な変化の中では、我々は皆、世界中で起こっている不安・動揺の証言者である。ツァイの作品に触れることで、苦痛から解き放たれ、新たな自信を見い出せることだろう。混沌と不安の世界の次には、人間が干渉し得ない秩序が訪れる。

—ウェン・イン・ツァイ





Born in China in 1928.

Tsai, a pioneer researcher in electronic and computer controlled sculpture since early 1960's, has exhibited his cybernetic sculpture in major museums throughout the world, earning him international renown and setting a new direction for sculpture beyond kinetic art.

1950-Came to the USA to study Mechanical Engineering and Art at the University of Michigan, graduating in '53. Worked for ten years as a consulting engineer for architects.

1963-Awarded the John Hay Whitney Fellowship for painting.

1968-Second Prize in the E.A.T. competition sponsored by The Museum of Modern Art for his Cybernetic Sculpture, which was shown in THE MACHINE at M.O.M.A., N.Y.

Participated in Cybernetic Serendipity at ICA, London.

1969-Fellow at the Center for Advanced Visual Studies at M.I.T.

1971-Awarded "Best Fine Art In Steel" by the American Iron and Steel Institute.

-Moved to work in Paris and continued to maintain a studio in New York.

1970-91-His further innovation resulted in the creation of diverse sculptures in different media:

'UPWARD FALLING FOUNTAIN' (Patented in U.S. and Japan), 1979;

'COMPUTER COLUMN' 1980 ; 'CYBERNETIC WATER & SCULPTURE SYSTEM', 1983 in ELECTRA at

Musee d'Art Moderne, Paris; 'MULTIPLE LIGHT COMPUTER ARRAY' 1985 ;

'SPAZIO CIBERNETICO DI TSAI' at LA BIENNALE DI VENEZIA, 1986;

interactive and computerized 'LIVING FOUNTAIN', completed in 1988 with a grant from IBM Gallery of Science & Art.

During this period, He has done more than 20 one-man exhibitions, plus innumerable group exhibitions in the USA and abroad, including Japan.

His sculptures are in the collection of more than 30 museums including: Albright Knox Art Gallery, Centre Georges Pompidou, Hayden Gallery, M.I.T., Israel Museum, Kaiser Wilhelm Museum, Museo de Arte Contemporaneo de Caracas, Museo de Bellas Artes, Ontario Science Centre, Princeton Museum, Saibu Gas Museum, Taiwan Museum of Art, Tate Gallery, Whitney Museum of American Art.

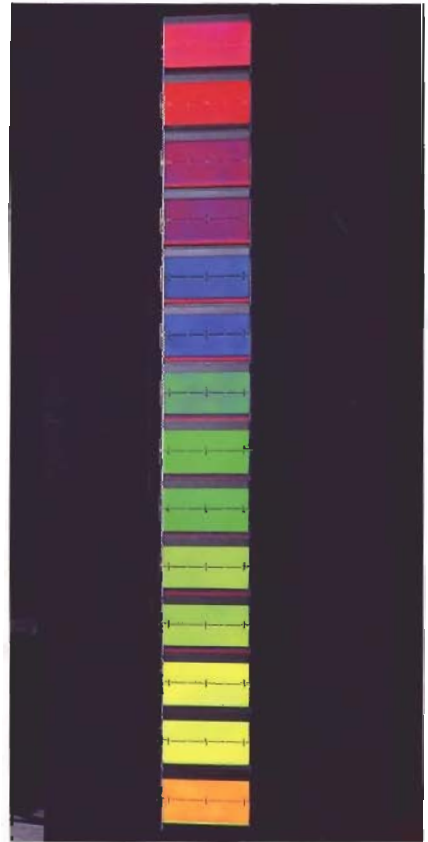
1928年中国生まれ

ツァイは、1960年代初等からエレクトロニクスとコンピュータ制御による彫刻のバイオニア的な探求者として活動してきた。世界中の主要な美術館で、サイバネティック彫刻の展覧会を開いて国際的評価を受け、彫刻においては、キネティックアートの枠を越えた新しい道を開いた。

1950年、機械技術と美術の勉強のため渡米、ミシガン州立大学で学ぶ。1953年に卒業してから10年間、建築の顧問技師として働く。1963年絵画でJ.H. ホイットニー賞をうける。1968年ニューヨーク近代美術館主催のE.A.T.コンペで2位受賞、同美術館の「ザ・マシン」展に出品。またICAロンドンの「サイバネティック・セレンディピティ」展に参加。1969年MIT高等視覚研究所員となる。1971年アメリカ鉄鋼研究所から、ベスト・ファイン・アート・イン・スチール賞を受賞。1971年スタジオをパリに設けたが、ニューヨークでの活動も継続する。1970年より現在に至るまで、彼の先進的、革新的な成果はさまざまなメディアをもちいる彫刻家たちの創作活動に多大な影響を与えた。

1979年「アップ・ワード・フォーリング・ファウンテン」(日米で特許)、1980年「コンピューター・カラム」、1983年「サイバネティック・ウォーター&スカルプチャー・システム」(パリ近代美術館「エレクトラ」展)、1985年「マルチプル・ライト・コンピューター・アレイ」、1986年「ツァイのサイバネティック・スペース」(ベネチア・ビエンナーレ)を発表、そして1986年コンピューター制御のインタラクティブな作品「リビング・ファウンテン」はIBMギャラリーよりグラントを授与される。この間20回以上の個展を開きアメリカ、日本を含む諸外国で開催された多くのグループ展に参加した。

彼の作品は30以上の各国の美術館に収蔵されている。アルブライト・ノックス・アート・ギャラリー、ポンピドゥー・センター、ヘイデン・ギャラリー、マサチューセッツ工科大学、イスラエル美術館、カイザー・ウィルヘルム・ミュージアム、カラカス近代美術館、ベラサルテ・ミュージアム、オンタリオ・サイエンス・センター、プリンストン美術館、西部ガス・ミュージアム、台湾省立美術館、テート・ギャラリー、ホイットニー美術館などである。



▲ COMPUTER COLUMN, 1980  
▲ DOUBLE DIFFRACTION, 1971  
photo : Si-chi ko



# ARTEC '91

## 第2回名古屋国際ビエンナーレ・アーテック '91

1991年10月10日(祝) - 11月10日(日)

名古屋市美術館・名古屋市科学館・白川公園

- 国際展 名古屋市美術館企画展示室・講堂・地下ロビー
- 一般公募展 名古屋市科学館天文館1階展示ホール
- テーマ展 「TV GAMES- 新たなリアリティーを求めて」  
名古屋市科学館理工館1階展示ホール
- パフォーマンス+フィルムショー
- ライティング&イルミネーション  
白川公園一帯
- 公式シンポジウム 名古屋市科学館サイエンスホール  
[1991年10月11日(金) - 10月12日(土)]

主催 — 名古屋国際ビエンナーレ開催協議会  
愛知県、名古屋市、中日新聞社、中部日本放送  
名古屋市美術館、名古屋市科学館

後援 — 外務省、通商産業省、科学技術庁、文化庁  
在日アメリカ・イタリア・オーストリア・オランダ・フランス・ベルギー  
各国大使館、ドイツ連邦共和国総領事館、英国文化センター  
JR東海、名古屋鉄道

協カ — ACMシーグラフ・トラベリング・アート・ショー、KLMオランダ航空、  
東芝EMI株式会社、日商岩井株式会社、日本シリコングラフィックス株式会社、  
任天堂株式会社、富士通株式会社、松下アイ・エム・ピー株式会社、  
株式会社ナムコ、株式会社ポリゴン・ピクチュアズ、株式会社リンクス

特別協賛 — 株式会社メイテック

協賛 — ソニー株式会社

審査結果/RESULTS

「ARTEC GRANDPRIX」

砂漠の泉

DESERT SPRING

ウェン・イン・ツァイ

Wen-Ying Tsai

1990-91 ●cybernetic sculpture  
U.S.A.

「ARTEC PRIZE」

サーヴァ川の、息づく場所

BREATHING SPACE FOR THE RIVER SAVA

ニュートン & ヘレン・ハリソン

Newton & Helen Harrison

1990 ●bio-sculpture  
U.S.A.

シネマと荒地との間に

BETWEEN CINEMA AND A HARD PLACE

ゲーリー・ヒル

Gary Hill

1991 ●video installation  
U.S.A.

生誕の記憶

SPAWN MEMORY

トマス・シャノン

Thomas Shannon

1991 ●sculpture, integrated medium  
U.S.A.

# ARTEC'91 国際展部門審査経過について

第2回名古屋国際ビエンナーレ国際展審査会は、1991年10月13日、別記審査委員7名全員が出席して行われた。

冒頭まず、委員の互選により審査委員長を決定することになり、私が委員長に選ばれた。引き続き審査方法についての討議に入り、賞はアーテック・グランプリ1点、アーテック賞3点であり、アーテック賞3点は同等であること、各賞を出品作品19点のなかから選ぶ際カテゴリーには特にこだわらないこと、賞は作品を対象とするものであるが、選考にあたっては作家のこれまでの仕事など背景も考慮すること等が確認された。選考の方法については投票によるものとするが、機械的に決めるのではなく十分に討議を尽くすということで合意された。

続いて委員全員により、自由に意見を交換しながら約2時間にわたって出品作品を見て廻り、休憩の後選考に移った。

選考にあたっては、最初に19点の出品作品それぞれについて各委員が意見を述べ、次いで賞の候補にふさわしいと思われる作品を、特に票数を定めずに投票することとした。なお投票は、最終投票を除いていずれも口頭によるものである。

第一回投票の結果、ツアイ、ヒル、シャノン、ハリソン、ヘス、シュネルの6作品が半数以上の委員の推薦を得た。続いて、0票、1票、2票の作品について順次討議を

重ね、改めてボーゲルを賞候補に加えて、上位6点とあわせて計7点のなかから賞を選ぶこととした。

第二回投票においては、上記7点のうちツアイ、ヒル、シャノンが上位三位を占め、ハリソン、ヘス、シュネルが同等4位であった。そこで、4位3点の中から1点を選ぶこととし、投票の結果ハリソンが選ばれた。引き続きグランプリの選考に移り、投票の結果ツアイが最高の4票を獲得した。この時点でさらに討議を重ね、改めて挙手による投票を行った結果、全員一致でツアイをグランプリ、残り3点をアーテック賞とすることが決定した。

ツアイは、これまでの実績に加えて、新しい技術的成果と作品の完成度が高く評価され、グランプリ受賞は妥当と思われる。ヒルの作品は、技術的に質の高さと洞察力の深さが、シャノンの作品は複雑な技術的試みと表現の詩的効果が多くの委員の賛同を得た。ハリソンの作品については、提示方法がアーテック出品作としてふさわしいかどうかという疑問も出されたが、現代的な問題提起の重要性と従来への活動の意義が評価された。いずれも受賞にふさわしい作品と言ってよい。

## 高階秀爾

(東京大学教授)

ARTEC '91 国際展審査委員長

# 国際展部門参加要項

主催者によって指名された世界各国の優れたアーティスト約20人のすべての参加作品は、開催協議会国際展部門審査委員会による選考の対象になるとともに、「第2回名古屋国際ビエンナーレ・ARTEC '91」の会期中名古屋市美術館で一般公開される。

## <1. 本コンペティションの意義>

アート & テクノロジーをテーマとする名古屋国際ビエンナーレ・ARTECの中心事業として位置づけられる本部門は、以下の意義を持ち世界へ情報を発信する。

- 世界の第1線で活動するアーティストの最新作を一堂に集め、この表現領域の現状と可能性を中部圏はもとより広く国内外へ問いかけること。
- 参加アーティストが一堂に集結できる機会を創出し、国内外のアーティストおよび関係者同士の国際的な交流の場を提供すること。
- 日本の最先端技術産業の集積地たる中部圏において、21世紀の都市構築・生活創造のソフトづくりに向けての礎とすること。

## <2. 作家の指名>

開催協議会役員はアート & テクノロジーの分野に有形無形の貢献を果たしてきており、それぞれの国および地域で影響力を持っている。かれらの協力のもと事務局では世界各地のアーティストに対して取材活動を展開し、ディレクターズ・グループが検討を重ねアーティストノミネートリストを作成する。その結果をもとに協議会会長が正式に指名を行う。

## <3. 賞>

参加作品は国際展部門審査委員会によって審査され、その内容、技術はもちろん名古屋国際ビエンナーレの掲げる理念を最もよく体現するものに以下の賞が与えられる。

- ARTEC GRANDPRIX 1点  
正賞および300万円
- ARTEC PRIZE 3点  
正賞および100万円

## <4. 作品について>

1989年7月以後に制作されたものに限

定する。ただし、すでに発表された作品も対象とする。

作品は、新しい科学技術を単一的もしくは複合的に応用したもので、展示面積30㎡以内、高さ4m以下とする。

## <5. 作品展示について>

基本的造作物やAV機材は開催協議会が準備する。

展示作業は1991年10月2日より9日までの間に行う。

詳細については会場の条件などを踏まえ、開催協議会とアーティストが協議の上、決定する。

## <6. 作品輸送について>

輸送費および保険料は、アーティストと協議の上開催協議会が負担する。

輸送方法は開催協議会とアーティストで個別に協議し、決定する。

## <7. 参加アーティストへの費用負担について>

開催協議会は、アーティストに対し一律の作品制作補助費を支給する。また、旅費および滞在費も支給する。

## <8. 展示公開について>

すべての参加作品は名古屋市美術館にて、1991年10月10日より11月10日の期間一般に公開される。

## <9. スケジュール>

1991年10月6日、7日

ディレクターズ・グループ・ミーティング

11月 アーティスト指名

1991年1月31日 参加表明締切

3月31日 参加作品プラン締切

10月2日～9日 作品展示作業

10月10日 一般公開開始(11月10日まで)

10月13日 審査委員会

10月14日 表彰式



# 名古屋国際ビエンナーレ開催協議会

## ビエンナーレ開催協議会

名誉総裁		三笠宮寛 仁親王殿下
名誉顧問	科学技術庁長官	山 東 昭 子
	文化庁長官	川 村 恒 明
顧 問	中部通商産業局長	清 川 佑 二
	愛知県知事	鈴 木 礼 治
	名古屋市長	西 尾 武 喜
	名古屋商工会議所会頭	加 藤 隆 一
	中部経済連合会会長	松 永 亀 三 郎
	中日新聞社会長	加 藤 巳 一 郎
会長(理事)	中日新聞社社長	大 島 宏 彦
副会長(理事)	愛知県副知事	奥 野 高 嶺
副会長(理事)	名古屋市助役	平 岩 利 夫
副会長(理事)	中部日本放送社長	高 橋 一 夫
副会長(理事)	メイテック社長	関 口 房 雅
理 事	画家	安 野 光 雅
理 事	愛知県新文化会館建設事務局美術専門監	浅 野 徹
理 事	名古屋大学前学長	飯 島 宗 一
理 事	建築家	磯 崎 新
理 事	環境設計デザイナー	泉 眞 也
理 事	国際インダストリアルデザイン団体協議会名誉顧問	柴 久 庵 憲 司
理 事	京都大学名誉教授	岡 田 節 人
理 事	名古屋科学館館長	岡 田 博
理 事	早稲田大学教授	加 藤 一 郎
理 事	日本グラフィックデザイナー協会会長	亀 倉 雄 策
理 事	環境デザイナー	河 野 鷹 思
理 事	建築家	菊 竹 清 訓
理 事	電気通信科学財団理事長	白 根 禮 吉
理 事	東京大学教授	高 階 秀 爾
理 事	愛知県立芸術大学学長	建 畠 嘉 門
理 事	名古屋市美術館館長	谷 隆 夫
理 事	千葉大学教授	辻 内 順 平
理 事	華道家	勅 使 河 原 宏
理 事	日本インダストリアルデザイナー協会理事長	豊 口 協
理 事	日本映像学会名誉会長	南 博
理 事	ファッションデザイナー	山 本 寛 斎
理 事	ジョルジュ・ポンピドゥー国立現代美術センター館長	ジャン・ユベール・マルタン(仏)
理 事	評論家・ミラノ大学教授	ビットリオ・ファゴネ(伊)
理 事	パリ大学名誉教授	フランク・ポペール(仏)
理 事	数学者・エール大学教授	ベノワ・マンデルブロウ(米)
理 事	マサチューセッツ工科大学高等視覚研究所所長	オットー・ピーネ(米)
理 事	ジョルジュ・ポンピドゥー国立現代美術センター顧問	ポントウス・フルテン(仏)
理 事	美術評論家	シンシア・グッドマン(米)
理 事	美術評論家	ヤンチャ・ライハート(英)
理 事	クンストハーレ美術館館長	ユルゲン・ハルテン(独)
理 事	ロサンゼルスカウンティ美術館二十世紀美術部長	モーリス・タックマン(米)
理 事	ケルンメディアアートスクール教授	マンフレッド・アイゼンバイス(独)

## (運営委員会)

委 員 長	中日新聞社常務取締役	酒 向 莞 三
副 委 員 長	愛知県商工部長	市 川 南
副 委 員 長	名古屋経済局長	登 内 洋 人
副 委 員 長	中部日本放送常務取締役	佐 橋 嘉 彦
副 委 員 長	メイテック常務取締役	田 中 吉 武
委 員	多摩美術大学教授	秋 山 邦 晴
委 員	名古屋科学館副館長	浅 野 道 子
委 員	造形作家	伊 藤 隆 道
委 員	ホログラフィー作家	石 井 勢 津 子
委 員	名古屋造形芸術大学教授	石 黒 錦 二
委 員	東京芸術大学教授	内 山 昭 太 郎
委 員	グラフィックデザイナー	勝 井 三 雄
委 員	愛知県商工部次長	加 藤 幸 一
委 員	中部日本放送SP事業部長	北 村 統
委 員	国際デザインセンター設立推進委員会事務局長	木 村 一 男
委 員	成安女子短期大学教授	木 村 要 一
委 員	コンピューター・グラフィックス作家	幸 村 真 佐 男
委 員	環境デザイナー	小 山 太 郎
委 員	名古屋市美術館副館長	新 海 明 敏
委 員	中日新聞社社会事業部長	鈴 木 周 作

委 員	東京大学工学部教授	月 尾 嘉 男
委 員	名古屋造形芸術大学学長	寺 光 彦
委 員	名古屋市経済局商工部長	寺 倉 幸 夫
委 員	美術評論家	中 原 佑 介
委 員	美術評論家	南 條 史 生
委員(事務局長)	中日新聞社事業局長	西 川 順 之 助
委 員	メイテック常務取締役総務部長	林 勇 一
委 員	中部日本放送報道局長	日 比 野 義 扶
委 員	筑波大学教授	三 田 村 凌 右
委 員	芝浦工業大学教授	三 宅 理 一
委 員	名古屋市科学館学芸課長	三 輪 克
委 員	技術評論家	森 谷 正 規
委 員	中部日本放送取締役編成局長	安 富 幸 男
委 員	筑波大学教授	山 口 勝 弘
委 員	名古屋市美術館学芸課長	山 脇 一 夫
委 員	(財)名古屋都市センター専務理事	由 井 求
委 員	中日新聞社取締役編集局長	横 内 恭
委 員	東京大学教授	吉 川 弘 之
委 員	中部日本放送事業局長	若 松 英 治

(委員50音順・敬称略)

## (国際展部門審査委員会)

パリ大学名誉教授	フランク・ポペール(仏)
前ポンピドゥーセンター美術館館長	ジャン・ユベール・マルタン(仏)
マサチューセッツ工科大学高等視覚研究所所長	オットー・ピーネ(米)
ケルンメディアアートスクール教授	マンフレッド・アイゼンバイス(独)
建築家	磯 崎 新
京都大学経済研究所助教授	浅 田 彰
東京大学教授	高 階 秀 爾

(順不同・敬称略)

## (一般公募展部門審査委員会)

造形作家	伊 藤 隆 道
芝浦工業大学教授	三 宅 理 一
映像評論家	森 岡 祥 倫
美術評論家	南 條 史 生
大阪学院大学教授	大 村 皓 一
映像文化評論家	武 邑 光 裕
筑波大学教授	山 口 勝 弘

(順不同・敬称略)

## (事務局)

事務局長	西 川 順 之 助
チーフ・プランニング・コーディネーター	鈴 木 周 作
プランニング・コーディネーター	長 谷 川 剋
	喜 多 内 悦 郎
	白 羽 明 美
	竹 葉 丈
	土 本 順 治
	水 野 弘 之
	水 野 芳 郎
	ロバート・フレイザー
	古 田 真 一
	佐 藤 友 美
	岩 佐 弘 美
	蛭 原 浩 人
	石 井 俊 明
	柳 田 輝 子
	柴 藤 は づ き
	星 野 恵 美
	安 江 恭 子

## セクレタリー

ディレクターズ・グループ	
ロサンゼルスカウンティ美術館二十世紀美術部長	モーリス・タックマン(米)
ミラノ大学教授	ビットリオ・ファゴネ(伊)
美術評論家	シンシア・グッドマン(米)
美術評論家	ヤンチャ・ライハート(英)
筑波大学教授	山 口 勝 弘
美術評論家	南 條 史 生
名古屋市美術館学芸課長	山 脇 一 夫
中日新聞社社会事業部主任	森 茂 樹

(順不同・敬称略) 以上